

一一

乍恐以書付奉願上ハ

一金三十拾兩也

右は近年異國船度々渡来致ハニ付海岸筋御備有之御臺場御取建ニ相成然るに右入用向莫大の趣に付為御國恩聊御冥加金上納仕度存し先般以書付金七拾兩献上納願上ハ勿願書御請取に相成難有仕合ニ奉存ハ所此節又々追々御上納金相願ハ者共有之ハ向篤ト勘弁仕ハ勿七拾金と申ハては餘り少分にも御座ハ向書金七拾兩と右金三十拾兩差加え都合金百兩ハ仕り献上納仕度奉存ハ向何卒右願之通ハ仰付ハ下置ハは、格別難有仕合ニ奉存ハ依之乍恐尚又以書付御願奉申上ハ以上

寅二月九日

松橋上組 四郎兵衛

寛  
安政元年  
(一八五四年)

柴橋御役所

一二

乍恐以書付御届奉申上候

今般石炭御用に付有無可申立旨被仰渡小向村方は勿論私領寺社領共突撃仕小へ共右品一切無御座小依之此段御届奉申上候 以上

寅  
安政元年

寅四月九日

名主 四郎兵衛

(一八五四)

柴橋御役所

一一一

### 乍恐以書付奉願上小

天保十五年  
(一八四四年)

当御支配所松橋村上組名主四郎兵衛奉申上小私儀天保十五辰年中親四郎兵衛跡相統仕是迄御用村用共無滞相勤安穩ニ家内扶助仕罷在小段偏に御恩澤故の儀と深く難有存何卒御國恩を奉報度兼ねて志願罷在小宛去丑年中異船渡来仕小ては御役向其外品々莫大御物入多の由承知仕

丑年

嘉永六年  
(一八五三)

リ且又同年中稀なる早魃にて御支配所村々田畑損毛不少困窮人共難波の折柄に御座小向幾重にも御奉公一廉相勤め度出精仕小得共素々有余の分限にも無之小向甚以て少分恐入小へ共米百俵上納其外米百俵は村々難波の者共へ為救米差出度段相願小宛御向濟相成猶又当春に至リ右納米百俵拂代金江是金仕都合百西上納之積リ願上是又御向届被下置難有仕合奉存小然る処此節に至リ夫食差支用難行届村方も御座小趣及承小向夫々取調小所山内村々は何れも難

義にて小へ共就中小柳村の義は極貧窮の村方にて既是迫夫食拜借等被仰付厚以御救取続罷在  
小へば元来薄地の場所困窮人共のみにて夫食乞敷中には農具共失ひ小輩も有之宛作方行届か  
す左小津度々御救助被成下置小上の義御役所様へ相願小義も恐入差控罷在小へ共差当り仕付  
夫食不引足当惑の内役人只管相歎難波の段相違無御座小向前置書昨年中村々江差出方相願小米  
百俵の外此度別段ニ仕付夫食并農具代共手当仕り一村無難に相続為致度奉存小乍併相對にて  
右取斗方仕小ては自然心弛出来万一農業怠り小様よては却て村の爲めにも不相成義と心配仕  
小向右扶食米農具手当共施切の願御役所様江差出小向右の趣被仰向小柳村江御渡し遣下置  
小様仕度此段御申済ヒ成下置度左小は、難有仕合奉存小奉願上小 以上

嘉永七年  
(一八五四年)

嘉永七年寅四月

当御支配所

羽前村山郡松橋村上組

名主 四郎兵衛

柴橋御役所

一四、

御預金預証文の事

一金四百二十四両也

右者柴橋御陣屋附郡中備初御買入代金の内書面の通奉願上ハ宛與正ニ御座ハ 然る上は大切  
に心附御入用の節ハ何時成共上納可仕ハ夜令火盜の難其外異変の儀有之紛失仕ハ共急度并納  
可仕ハ万一上納差支ハ別紙質地御取上御拂可ヒ仰付ハ若質代金に不足仕ハは、加判人  
共引受急度并上納仕聊御差支不相成様取斗可申ハ為後日預リ証文差上申処如件

嘉永七年  
八月

嘉永七年  
安政元年  
(一八五四年)

松橋村名主 四郎兵衛

組頭 三 徳

万次郎

松永善之助様

柴橋御役所

前書之通相違無御座ハ依之奥印奉差上ハ 以上

郡中惣代 谷沢 嘉兵衛

天満 市郎兵衛

海味 太右衛門

差上申質地証文の事

一上田 九十二筆

一中田 九十筆 但水帳名前持主四郎兵衛

×百八十二筆

高百廿八石一斗八升一合

上田四町於七步 石盛三十二

此質地金式百八十四兩一分永百四十六文六卜

但 壹反歩 金七兩

中田四町三畝十八歩 石盛二十九

此質地金式百八十四兩一分永百四十六文六卜

高百十七石四升四合 但壹反二付金六兩

合反別八町四畝五卜

此質地金五百式於式兩式分

永五十六文六卜

内金九十八兩二分永五十六文六分凡二割余増

殘金四百二十四兩 御預金分

右者柴橋御陣屋附郡中備初御買入代金之内別紙証文の通金四百式於兩之上成御預以二付為引  
当書面の質地奉差上以処相違無御座以依之質地証文差上申処如件

嘉永七寅年八月

松橋村上組

名主 四郎兵衛

組頭 三 德

親類 万次郎

松永善之助様

柴橋御役所

嘉永七寅年  
(一八五四年)

前書之通私共立会相改小処相違無御座小  
依之奥印仕奉差上小 以上

郡中惣代 谷沢村名主 嘉兵衛

天満組名主 市郎兵衛

海味村名主 太右工門

一五、

### 以書付願上候

丑年  
天保十二年  
(一八四二年)

当御支配所羽州村山郡松橋村名主堀米四郎兵衛申上小私義亡父次右エ門隱居家督後引続名主  
役相勤是迄無懈怠救代連綿安住罪在小偏に御恩澤深く難有右小付身分相応の御奉公筋は勿論  
窮民救方等兼て心願にて追々救方仕居小処去々丑年の義は稀成早般違作にて村々難波の者不  
少に付紫橋寒河江西陣屋附村々救米又は金子差出其外最寄の村々は御料御私領の無差別安米  
売渡且又乍恐於御上様も近末異船渡来其次第により安危にも拘リ小義にて西御丸御普請を始  
め臨時の御出方打続小折柄小へば莫大の御入用をも不被為厭内海へ嚴重の御臺場御取建被  
仰出猶其外にも品々御所置の次第も被為在小承知仕リ御仁惠の程難有御國恩為冥加上納金

仕小宛右は御備筋御入用の内へ上納金仕小付苗字御免被仰付小旨阿部伊勢守御差図に付松平河内守被仰渡の趣被仰渡冥加至極難有仕合と奉存小右の次第小付猶更窮民救方等出精仕致村々探索仕小宛当御支配所山内村々中には難渋小落入村役人共等の不及力難捨置者共有之小に付追々取調小積りに御座小へ共差当り小柳村の義は必至と難渋御年貢上納も難出来是迄種々厚御世話も被為在小へとも元末困窮最早亡村にも可及艱不易義に付何れにも永統きの手当仕度然る宛当年の美ハ親次右衛門病氣引統彼是物入多にて金子手詰り右仕法も不行届歎ヶ敷次第に御座小向篤と勘考仕小宛先年秋元但馬守様御領分高櫛村弥平次と申者に金子貸遣し小宛返済無之ニ付無抛天保十二丑年同人相手取り江戸表出訴仕り御尊判頂戴相附追々御調の上濟方の々厳敷御利害有之猶吟味中の宛掛合の上滞願高金三百七拾五両の内金七拾両当金済同十三寅十一月二日請取残金三百五両の内五十五両は無利息式百五拾両は月一分の利足に相定め翌卯十一月限不残返済の積り証文書替熟談内済致し訴答連印瀆口証文奉差上小宛御向届に相成り一同帰村仕其後期月に至り小ても返済不致小向種々及掛合小宛御奉行所御吟味の上瀆口証文差上小美に小へは聊違背無之又小出訴相成様にては御奉行所を欺き小姿にて恐入小向月延猶豫致し呉小様達て相願尤の美相違も有之向敷存し差延置小宛是又違約仕小向追々催促仕小宛品能申進し最早此節に至り小ても進も返済難出来様不当の美申向畢竟右用立金を以て無難に用弁いたし殊小瀆口証文期月通返済無之節も自愛を以出訴も不致差延置小恩分を忘却いたし今以て返済無之段難得其意一鉢弥平次儀但馬守様御領分に於ても際立小身元宜しき者にて返済方に差支も無之小へ共天保十四卯年十二月中貸金等相对済被仰出有之小ニ付訴

難相成儀と侮此節迄滞り元利金六百五拾兩余可踏倒所存に有之既ま十ヶ年余の間聊も返済無  
之剩返済難出未様申し眼前不実の廉相頭以の外の義にて右相對済御觸面にては実意を尽し差  
引いたし御奉行所へ出訴不相成を見込捨置可致様と心得いもの等急度御吟味も可有之趣にい  
上は誠平次義右御觸の趣不相背実意を以て取滞金六百五兩余早々済方仕い様其筋へ御願下  
度左いへば石金子を以て前書小柳村は勿論難波村々救方仕乍恐御国益筋をも取計申度い尙偏  
に此段御願申上候

卯  
安政三年  
(一八五五年)

卯十一月

当御支配所

羽前村山郡松橋上組

名主 堀米四郎兵衛

柴橋御会所

一六

乍恐以書付奉願上候



一	米拾俵也	若木村名主	忠右工門
一	〃拾俵也	築沢村名主	佐七
一	〃拾俵也	八鍬村名主	興兵衛
一	〃參拾俵也	米沢村	八之助
一	〃拾俵也	長崎村名主	弥右工門
一	〃拾俵也	〃名主	文四郎
一	〃拾俵也	同村	新太郎
一	〃拾俵也	〃	太惣次
一	〃拾俵也	高屋村名主	太兵衛
一	〃五俵也	〃名主	十太郎
一	〃五俵也	〃	七郎右工門
一	〃拾俵也	白岩村名主	弥右衛門
一	〃拾俵也	〃	門三郎
一	〃拾俵也	〃	庄右衛門
一	〃七俵也	〃	清九郎
一	〃七俵也	〃	善太郎
一	〃貳拾俵也	吉川村	長左工門
一	〃五俵也	〃	三九郎

卯  
天保十四年  
(一八四三年)

一	米五俵也	吉川村	権三郎
一	拾貳俵也	中の村	市太郎
一	拾壹俵也	〃	市兵衛
一	貳拾五俵也	西里村	庄左工門
一	拾五俵也	白山堂	弥右工門
一	拾五俵也	中島組	任右工門
一	拾俵也	〃村	新兵衛
一	拾俵也	〃	佐之助
一	拾俵也	天満組名主	市郎兵衛
一	拾俵也	松橋村下組	治兵衛
一	參拾俵也	〃上組	直蔵
一	拾俵也	〃	利助
一	拾俵也	〃	卯右工門
一	拾俵也	海味村名主	太右工門
一	拾俵也	谷沢村名主	嘉兵衛
一	拾俵也	〃	七郎兵衛
一	八拾俵也	金谷原村	傳四郎

以上

右者去卯十月中江戸大地震にて御城外所々潰破損多し又々当八月廿五日大風雨大荒にて右

安政三年  
(一八五六年)

同様所々及大破御捨置難ヒ遊御所詰御入用等も莫大の事の由寄々承知仕恐入い儀に御座い  
右ハ九牛の一毛には御座いへ共御用途の内へ御差加へにも罷成いへは冥加至極難有仕合奉存  
い右願の通献納米上納ヒ仰付い様仕度偏々奉願上矣 以上

安政三辰年十月

松永善之助様

柴橋御役所

前同断文言よて別紙に

一米貳百俵也

堀米四郎兵衛

献納米上納

一七

御請

幸生銅山

請 負 人

小 役 人

敷 々 預 共

其方共儀一昨年中銅山改法以未敢て改心の様子も無之様被存甚以心得違に有之嚴重に可取調

処恐入趣を以向後急度改心万端心付いづれにも出銅相進様可取計旨申上くる上は格別の勘弁

を以て是迄の儀は別段不及沙汰若此上等由於有之は直様無用捨廢法み取計遣向兼ねて其旨相

心得且又後見堀米四郎兵衛外一人年限明に付後見御免の儀申立つる向承り届遣すに付以未稼

方の儀は山中一同へ為相向於御役所都て取締いたし遣向其旨相心得

但銅柙の儀是迄は兎角等由の趣相向い向以未は格別入念若此上にも不埒の義有之敷方は其

頭早速下山申付い向此段も兼て心得罷在事

堀米四郎兵衛

入之助

午年

天保五年

(一八三四年)

其方共儀銅山数年不成績にて既に休山にも可相成折柄ニ付午年中より請負後見申付い向格別

差障り入用も不厭稼方骨折去未年出銅は近年に出進み一段の事に存する然る処後見年季明に

付御免有之段申立い無據義に付願の趣承り届尤是迄格別丹誠いたし追々模様立直る敷々も有

之ニ付右の場所は尚此上心付折節見廻りいづれにも添心致し遣し出銅相進御國益を取計様よ

致事

右之通ヒ仰渡一同承知奉畏い依之御請奉申上い 以上

萬延元申年九月十八日

大切松木検断

辰之助

敷頭

萬延元申年  
(一八六〇年)

柴橋御役所

小役人

三太郎  
市太郎  
龍藏  
倉松

請負人

永本七左工門  
木村右内  
相原駿平  
富樫周之助

請負人惣代

七兵衛  
吉十郎  
久藏

後見人

清助出府二付  
悴武三郎  
入之助  
堀米四郎兵衛

松橋村

堀米四郎兵衛

一、天保十亥年西御丸御焼失の節金貳百兩上納仕リ翌々子年御褒美銀二枚ヒ下置小

一、嘉永七年寅年異國船到来の後御臺場御築立の砌金貳百兩上納仕リ翌卯年苗字御免ヒ仰付

小

一、安政三辰年米貳百俵献納仕小

一、万延元申年御本丸御普請に付金百兩上納仕リ翌酉年御褒美銀七枚ヒ下置小

右役所より御尋ねに付丑十月三日右の通書取会所より差上小事

但三宅鑿作様御支配の節也

上納金請取

松橋上組名主

金参百兩也

堀米四郎兵衛

外永二百五十文 包分

右者御進発御用途之内上納金書面の通り請取申小 以上

三宅鑿作手付

齊藤勝平

同人手代

柴田庫太郎

慶應元年  
(一八六五年)

慶應元年  
十月

## 乍恐書付奉歎願候

当御領分羽州村山郡松橋村上組名主堀米四郎兵工親類共并村役人一同奉申上候当四月廿七日  
 庄内人数大勢四郎兵衛宅江不意に押入一應の糺明もななく倅要之助を無躰に捕縛有合の武器類  
 不残為差出小上金錢等及穿鑿武器其外共持行尤其折柄四郎兵衛儀寒河江出張中にて宅江不居  
 合小へ共同人父子右人数同様前度同道いたし小様被仰聞小ニ付驚入只管宥免相願小得共一圓  
 無聞入刺江同道不罷出小は、四郎兵衛父子は勿論家族共ニ至迄切殺小上家土藏其外共不残可  
 燒拂旨嚴重被申聞一同悲歎よ沈誠残念よ奉存小へ共役人様の武威に恐怖いたし無扨兩人被引  
 立寒河江陣中江罷出居小故を以四郎兵衛義四月入日谷地北口町御泊先薩州様御陣所江被召出  
 翌九日御取捕相成御陣中所々御引圓、預リ詰リ柴橋表におゐて入窄被仰付罷在小儀の処庄内  
 人数再度白岩山内より押出来同月廿六日石原藤助と申方の手にて出窄相成小処四郎兵衛儀入  
 窄中持病の疝癢差起及難儀必至と治療仕小へ共全快無之先年奥州仙臺江罷出小節右持病療治  
 快復いたし小ニ付又々右醫者江罷出療治請度旨を申五月二日寒河江表より直と発足仙臺江罷  
 出居数月相立小而も帰宅無之度々帰宅の儀申請遣小へ共頭痛眩暈等の気味合にて如何様にも帰  
 宅難致旨申越当惑罷在且本倅要之助儀は前件奉申上小通四月廿七日庄内人数に被引立寒河江  
 陣中江罷出居同前より四月八日庄内江被引連度々暇相願小へ共更に不相叶是亦数月彼表江被  
 差留帰宅無之四郎兵衛父子の内何れか村方へ不居合小ては不馴の租頭共のみにて第一御用村

用とも差支殊には四郎兵衛家事向取贖方に困入悴要之財を帰宅為致度村役人並百姓一同より七月上旬寒河江表庄内仮役所江歎願書を以要之助暇の儀相願小願意の趣庄内表江申遣追て沙汰可及旨被申南書面預りに相成小後は有無の達も無之打過罷在休中八月十日要之助儀漸の事にて帰宅翌十一日寒河江仮役所江罷出小宛酒井家江召抱相成村山郡に於て奉公いたし小様との儀同前にて被相達要之助始親類共一同十方に暮品々申之宥免相願小へ共中々以申届不相成遂、谷地江出張相勤小様被申小ニ付いかんとも逃除相成兼乍難波同前江罷出奉公いたし居小中先月廿日寒河江表に於て炮発相響小否又々庄内人数に被引立下之方へ俱、引取小就ては要之助儀酒井家江召抱の身分に相成小上は四郎兵衛前跡相統難相成四郎兵衛連も仙臺表よ於て長々病氣いたし居今以快方不相成是以家事向取贖方不埒明々付親類村役人一同及談判小宛二百有余年の向連綿と百姓永統罷在休株式今更及頽廢小も歎ケ敷奉存四郎兵衛分家の内重五郎儀は当四郎兵衛舎弟よ小向重五郎を四郎兵衛名跡と相立是迄の通百姓取統致小様仕度幾重にも奉歎願小何卒出格の以御慈悲右の逸々御高察被成下置願の通被仰付被下置小は、莫大の御仁恵と難有仕合奉存小 以上

松橋村上組  
百姓 堀米直藏

同村同組

利助  
重五郎  
卯右衛門  
四郎次

慶応四年  
(一八六八年)

慶応四年十月



柴橋

御役所

	〃	〃	吉	兵	衛
	工藤小路村	仁			助
	松橋村上村				
	組頭	徳			三
	同村				
	〃	久	五		郎
	同村				
	百姓代	万	次		郎

口上

一、四郎兵衛出窄の儀如何

是は壬四月廿六日庄内御人教白岩山内より押出石原藤助様と申御方の御計みて出窄相成小

一、同人出窄後如何成行小哉

是は四郎兵衛入窄中持病差起及難義全快不致先年仙臺にて療治致小醫者に罷出又々療治致度儀を申五月二日に寒河江表発足いたし仙臺み罷出居歸宅無之小

一、悴要之財は如何相成小哉

是は四月廿七日庄内御人教被引立罷出小後庄内表江被運行小み付度々御暇願もいたし小由に小へ共不相叶村方よりも難願仕小へ共無御許八月十日に歸宅いたし翌十一日寒

河江表に庄内様仮御役所に御届罷出ハ処庄内様より召抱に相成ハ趣の御沙汰同所に於て御達有之夫より谷地長願寺江出勤いたし居九月廿日同所詰御人数同道下の方江引取ハ

一、土藏類封印の義如何

是は至四月廿七八日頃庄内様新整隊富田修輔様と申御方御出封印不残御解被成土藏其外御見分相成取乱ハ品物等夫々取添付置ハ様被申付ハへ共官軍様へ御伺不申上ハては取始末仕兼夫成に差置ハ中土用入土藏後風不入ハては品物腐れ損ハじ故免も角品物記帳いたし相改置ハ様四郎兵衛よりも申越有之ハ向任其意相改土藏兩置ハ次第に御座ハ

一一〇

乍恐以書付御歎願奉申上候

当御領所羽州村山郡柴橋附郡中惣代其外左のもの共一同奉申上、松橋村上組名主堀米四郎兵

衛儀郡中よおみても重立い身元のものよて祖父代より名主役相勤一体憐み深く心差宜敷ものにて当四郎兵衛儀右心差を請継居村は勿論郡中難義をも相救ひ既先年山内難村相救として郡中江米差出切之儀取計当時当御陣屋御圍柵の内江柵五拾石入斗は別段よ相備い儀にて郡中の言にも相成いものに御座い処去ル亥年中新見蠟蔵様御支配の砌御当節の訳柄夫々被仰諭斯の形勢に至いては博徒其外悪徒共暴行の憂も難斗依て農兵御取立方の儀被仰出の趣を以種々御見込相立右四郎兵衛其外等江農兵頭取役被仰付右は自然御奉公筋にも相当りい向相應の武器類用意可致置旨被仰申乍迷惑右御諭の次第難黙止追々武器類買調所持罷在い儀よ御座い処当年の交争出来当四月廿七日庄内衆人数押寄い砌多人数四郎兵衛宅江押参り何等の札方も無之悴要之助を無差と取押武器所持の趣よ付早々可差出旨嚴重被申仰天狼狼所持の無残差出其節四郎兵衛儀寒河江罷越居留守中よて右由面および罷歸りい処同人并要之助俱に右人数同様の支度にて同道可致旨置又被申面警入強て宵免相願いへ共無面済延引およびいはいは、四郎兵衛父子は不及申家族のもの等も切害可及様被申威残念至極とは奉存いへ共多人数の武威に怖れ無據寒河江陣所へ被引立其上要之助は庄内表江被召連尤四郎兵衛の儀は差戻に相成り帰宅罷在い処何様の蒙御疑心い哉因四月八日薩州様御人数北口御宿陣江ヒ召出翌九日御召捕よ相成り御陣中所々御引廻相成警款仕既よ一命の程も難計艱難仕相歎居い段其節も親類ものより被取捨御参謀大山格之助様江種々歎願および夫々御取調中御引揚に相成又々庄内家人数押来り旁十方に暮罷在い内持病の疴癘差危相悩み難義罷在いこ付薬用手当も仕い得共快方の見留無之先年石持病の療治受い醫師奥州江差越居い向其段御届奉申上右醫相尋同所へ参り療養罷在勿論前癘の次第柄而已にて別段子細も無之此上御取調御座い様にては何様の儀も可申上様

無御座奥に奉忍入い段今般親類の者共より私共へ只管取遣い向御奥相糺い処石仕儀に無相違相向い向何卒出格の以御憐愍御慈悲の御沙汰御座い様仕度此段幾重にも奉歎願候石願の通御座届被成下置いは、偏り御仁恵と難有仕合に奉存、以上

当御領所

羽前村山郡松橋村

久五郎 印

徳三 印

郡中惣代

善兵衛 印

仁左衛門 印

五右衛門 印

藤右衛門 印

民政方

御領所